

容は、川上・辻井，2008 参照）。

2. 調査参加者 コースには1歳～3歳児用，3～5歳児用（健常児）と，子どもの発達に育てにくさや気になるところを感じており，地域が開催している他の親子支援育成事業の育児教室に参加している母親用の3種類である。1～3歳児用，3～5歳児用に参加した母親（以下一般群）は27名であり，子どもの発達に対して育てにくさを感じている母親用に参加した母親（育児困難群）は18名である。

参加申し込みは，大府市の広報をみてペアレントトレーニングへの参加を申し込んだ場合と，親子支援育成事業に関わる地域の職員から参加を勧められて応募した場合とがある。

3. アンケート内容

(1) 養育観 子育てに関わるポジティブ，ネガティブな意識（私の子どもは育てやすい子どもだと思う）や感情（子どもの育児は楽しいと思う，子どもの育児がうまくいっていないと感じる），養育観（子育てによって子どもの個性や性格は変わると思う）をたずねる項目であり，計30項目。

(2) 理想自己像と理想の母親像 「自分はこうでありたい」という理想自己像と「こんな母親でありたい」と思う理想の母親像をそれぞれ自由記述で3個ずつ表記させた。そして，理想自己像，理想の母親像それぞれについて，現実の自分とどのくらいずれているのかをたずねた。理想の自分から現実の自分とがずれていればいるほど精神的健康度は低くなり，自己受容が高まるにつれて，両者のズレは減少する。

(3) 抑うつ（BDI-II） ベック抑うつ質問票第二版を用いた。これは抑うつ症状の

重症度（極軽症，軽症，中等症，重症）を判定するための21項目からなる自記式質問調査票である。アメリカ精神医学会によるDSM-4の診断基準にそった症状の評価をするために開発され，世界中で使用されている。日本語版が小嶋・古川（2004）によって開発されている。

4. 調査手続き アンケートをペアレントトレーニングの第1回目（事前）と最終回にあたる第5回目の講座終了後に実施した。回収方法は，ペアレントトレーニング講座の時間配分の都合から，その場で回収した場合と，郵送で回収した場合がある。

（倫理面への配慮）

研究参加者への研究目的や得られた資料の管理や使用について説明し，理解が得られた場合のみ，研究に協力していただくよう最大限，参加協力者への人権に配慮した実施を行った。

C. 研究結果

1. 養育観得点について

(1) 事前事後得点の比較

①一般群

事前事後アンケートの得点に有意な差があるかを検討するために，対応のあるt検定を行った。網掛けの項目は，ペアトレ前後で変化がみられたものであり，網掛けのみの項目は実施後に得点が上がったもの，斜体のものは実施後に得点が下がったものである。多くの項目で肯定的な内容の項目の得点が増加し，否定的な項目の得点は減少していた。このことから，ペアレントトレーニングの実施後において，養育観に肯定的な変化が表れていることが示された。

②育児困難群

上記の分析と同じく事前事後アンケートの得点に有意な差があるかを検討するために、対応のある t 検定を行った。詳細は Table 2 参照。「私の子どもの良いところを 10 個挙げることができる」「子どもの育児が楽しいと思う」など、肯定的な項目の得点があがっている傾向がみられた。一方「子育てによって子どもの個性がきまると思う」、「自分はほめられて育てられた」という項目の得点は下がっていた。

(2) 育児困難群と一般群との得点比較

①事前得点の比較

子育てに関する項目（事前アンケート）について、子育て困難群と一般群の得点を比較した。詳細は Table 3 参照。網掛けの項目は一般群の得点が高かったものであり、網掛けかつ斜線の項目は子育て困難群の得点が高かったものである。

「私のこどもは育てやすい子どもだと思う」など、肯定的な項目は一般群の得点の方が高く、「私のこどもは時々かわいくなる」など、否定的な項目は子育て困難群の方が高かった。つまり、子育て困難群は、ペアレントトレーニング開始前の状態において、子育ての難しさを強く感じていることが示されている。

②事後得点の比較

事後得点について、育児困難群と一般群の得点を比較した。詳細は Table 4 参照。事後テストでも、肯定的なものは一般群の得点が高く、否定的な内容は育児困難群の方が高いという結果がみられた。しかしながら、事前テストで一般群と育児困難群と

の間に差がみられた項目の中には、事後テストにおいて両方のグループの間に得点差がなくなっているものがあった。「子どもの性格や個性がよくわかっている」、「私のこどもは時々かわいくなる」、「子どもの育児が楽しいと思う」などの項目は、ペアレントトレーニング後に両グループの差がなくなっていた。

2. 抑うつ得点と理想－現実自己のズレ得点の事前事後変化について

抑うつ得点 (BDI-II) と、理想－現実自己のズレ得点の事前事後得点を比較した。

①一般群

一般群のペアレントトレーニング実施前後の得点の差を検討するために対応のある t 検定を行った。詳細は Table 5, Figure 1, Figure 2 参照。抑うつ得点は事後の方が下がっていたが、有意な差はみられなかった。一方、理想－現実自己のズレ得点には有意な差がみられ、事後の方が減少していた。

②子育て困難群

子育て困難群においても、一般群と同様に対応のある t 検定を行った。詳細は Table 6, Figure 3, Figure 4。結果、抑うつ得点は下がっていたが、有意な差はみられなかった。しかし、理想－現実自己のズレ得点には有意な差がみられ、事後の方が減少していた。

D. 考察

ペアレントトレーニングの実施前後の養育観得点の比較では (Table 1, 2), 一般群、育児困難群の共に、ペアレントトレーニングの実施前と比較して、実施後に肯定的な

方向への変化がみられた。このことによつて、ペアレントトレーニングの効果が明らかとなったといえる。

しかし、一般群と比較して、育児困難群では、肯定的な変化がみられた項目数が少なかった。養育観得点の一般群と育児困難群との比較においては (Table 3, 4), 育児困難群では、一般群と比較して子育ての難しさを強く感じていることが示されていた。さらにペアレントトレーニングの実施後には、一般群との間に差がなくなるほど肯定的な変化をみせた項目が増加していたが、「私の子どもは育てにくい子どもだと思う」「子どもの育児が辛いと思う」などの項目の差は縮まっていなかった。以上の結果からは、育児に対する困難度によってペアレントトレーニングのやり方を調整することや、子育て困難群に対しての長期的な支援が必要であることが示されている。

また、抑うつ得点、理想-現実自己のズレ得点の変化については、一般群、子育て困難群の共に、抑うつ得点には事前事後の差がみられず、理想-現実自己のズレ得点には有意な差がみられ、事後の方が減少していた。この結果は、ペアレントトレーニングにおいて、自分と子どもの現実を具体的な行動によって客観的に把握することを繰り返したため、母親が現実自己の肯定的な部分を再認識して自己イメージが変化し、理想-現実自己のズレが減少したのではないかと考えられる。理想-現実自己のズレは自己評価を規定するものであり、ズレが小さくなることは精神的健康につながる変

化である。本研究では、抑うつを下げる効果まではみられなかったが、ペアレントトレーニングによって自己像が肯定的は方向へと変化する可能性が示され、ペアレントトレーニングの効果を示す収穫が得られたといえよう。

E. 結論

本研究の結果から、ペアレントトレーニングによって、一般群、子育て困難群の共に養育観が肯定的なものへと変化し、理想-現実自己のズレが減少することが示された。しかし、一般群と子育て困難群との差も見出され、今後ペアレントトレーニングのやり方の調整や、子育て困難群に対しての長期的な支援など、柔軟な対応を考えていくことの必要性も示された。

F. 健康危険情報

(該当なし)

G. 研究発表

1. 論文発表

2. 学会発表

松岡弥玲・辻井正次 子育て期の母親に対するペアレントトレーニングの効果-事前事後の理想-現実自己のズレの変化について-日本発達心理学会第21回発表論文集,印刷中,2010.

H. 知的財産権の出願・登録状況 (予定も含む)

(該当なし)

Table 1 一般群のペアレントトレーニング実施前後の得点比較

注 網掛けはペアレントトレーニング後に点数が増加したもの。 網掛けかつ斜体はペアレントトレーニング後に得点が減少したもの。	ペアトレ前(27人)ペアトレ後(16人)				
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	事前事後の比較
A 1. 私の子どもは、育てやすい子どもだと思う	3.41	0.89	4.06	0.57	t=-2.41*
2. 私の子どもは、育てにくい子どもだと思う	3.00	1.04	2.25	1.00	
3. 私の子どものいいところを具体的に10個程度あげることができる	3.96	0.92	4.81	0.40	t=-3.56**
4. 私の子どもががんばっているところ(努力しているところ)が具体的に10個程度あげることができる	3.42	1.14	4.81	0.40	t=4.79***
5. 私の子どもの苦手なところや気になるところが具体的に10個程度あげられる	3.27	1.04	4.13	1.09	t=-2.47*
6. 私の子どもの困ったところを具体的に10個程度あげられる	3.00	1.18	3.94	1.29	t=-2.261*
7. 私の子どもの性格や個性がよくわかっている	3.41	0.80	4.13	0.50	t=-2.74*
8. 私の子どもの性格や個性がわからないと思う	2.67	0.73	1.69	0.48	t=4.90***
9. 私の子どもは、とてもかわいい	4.77	0.51	4.81	0.40	
10. 私の子どもは時々かわいくなる	2.65	1.35	3.13	1.41	
B 1. 子どもの育児が楽しいと思う	4.33	0.73	4.50	0.63	
2. 子どもの育児がつらいと思う	2.78	1.15	2.38	1.02	
3. 子どもの育児がうまくいっていると実感する	3.19	1.00	3.75	0.68	t=-2.15*
4. 子どもの育児がうまくいっていないように感じる	2.59	0.93	2.13	0.62	
5. 私自身のいいところを具体的に10個程度あげることができる	3.15	1.13	4.75	0.77	t=-5.17***
6. 私自身のがんばっているところ(努力しているところ)が具体的に10個程度あげることができる	3.15	1.10	4.75	0.77	t=-4.56***
7. 私自身の苦手なところや気になるところが具体的に10個程度あげられる	3.19	1.14	4.19	1.17	t=-3.47**
8. 私自身の困ったところを具体的に10個程度あげられる	3.15	1.06	4.19	1.17	t=-3.37**
9. 子どもを誉めることが多い	3.81	0.96	4.50	0.52	t=-2.33*
10. 子どもを叱ることが多い	2.93	1.24	3.13	1.15	
C 1. 子育てにおいては、悪い行動を叱って正さなければならない	3.59	1.05	2.81	1.05	
2. 子育てにおいては、よい行動を誉めて教えなければならない	4.70	0.54	4.63	0.62	
3. 子育てで困ったときは、自分の配偶者や親に相談する	4.33	1.07	4.56	0.63	
4. 子育てで困ったときは、自分の友人たちに相談する	4.11	1.15	4.50	0.63	
5. 子育てで困ったときに、相談する相手がなくて苦労することがある	2.22	1.40	1.69	1.08	
6. 自分の子育てのやり方はうまくいっていると思う	3.15	0.86	3.75	0.58	t=-2.83*
7. 自分の子育てのやり方がうまくいっていないと思う	2.52	0.85	1.88	0.72	
8. 子育てによって、子どもの個性や性格は決まると思う	4.00	0.78	3.38	1.26	t=3.47**
9. 自分は叱られて育てられたと思う	2.85	1.26	2.40	1.06	
10. 自分は誉められて育てられたと思う	3.59	1.12	3.31	1.20	t=2.78*

Table 2 子育て困難群のペアレントトレーニング実施前後の得点比較

	ペアトレ前(18人)		ペアトレ後(9人)		事前事後の比較	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
注 網掛けはペアレントトレーニング後に点数が増加したもの。 網掛けかつ斜体はペアレントトレーニング後に得点が減少したもの。						
A	1. 私の子どもは、育てやすい子どもだと思う	2.89	1.13	3.22	0.97	
	2. 私の子どもは、育てにくい子どもだと思う	3.28	1.18	3.33	1.00	
	3. 私の子どものいいところを具体的に10個程度あげることができる	3.22	1.06	4.56	1.01	t=-3.35*
	4. 私の子どもががんばっているところ(努力しているところ)が具体的に10個程度あげることができる	2.94	1.00	4.44	1.01	t=4.26**
	5. 私の子どもの苦手なところや気になるところが具体的に10個程度あげられる	3.12	1.22	4.00	1.22	
	6. 私の子どもの困ったところを具体的に10個程度あげられる	3.35	1.17	3.89	1.27	
	7. 私の子どもの性格や個性がよくわかっている	3.94	0.83	4.22	0.83	
	8. 私の子どもの性格や個性がわからないと思う	2.59	0.87	2.11	0.78	
	9. 私の子どもは、とてもかわいい	4.47	0.87	4.56	0.73	
	10. 私の子どもは時々かわいくなる	3.88	0.86	3.78	0.83	
B	1. 子どもの育児が楽しいと思う	3.71	1.05	4.22	0.67	t=-3.16*
	2. 子どもの育児がつらいと思う	3.41	1.06	3.44	1.01	
	3. 子どもの育児がうまくいっていると実感する	2.71	1.21	3.33	0.87	
	4. 子どもの育児がうまくいっていないように感じる	3.41	1.06	2.78	0.97	t=2.14†
	5. 私自身のいいところを具体的に10個程度あげることができる	2.47	0.87	3.89	1.45	t=-2.87*
	6. 私自身のがんばっているところ(努力しているところ)が具体的に10個程度あげることができる	2.82	0.95	4.00	1.50	t=-2.86*
	7. 私自身の苦手なところや気になるところが具体的に10個程度あげられる	3.24	1.03	3.67	1.32	
	8. 私自身の困ったところを具体的に10個程度あげられる	3.24	0.90	3.89	1.27	
	9. 子どもを誉めることが多い	3.59	0.94	4.11	0.93	t=-2.29*
	10. 子どもを叱ることが多い	3.71	0.99	3.56	1.24	
C	1. 子育てにおいては、悪い行動を叱って正さなければならない	3.88	1.11	3.22	1.30	
	2. 子育てにおいては、よい行動を誉めて教えなければならない	4.71	0.47	5.00	0.00	
	3. 子育てで困ったときは、自分の配偶者や親に相談する	4.41	0.71	4.56	0.73	
	4. 子育てで困ったときは、自分の友人たちに相談する	4.24	0.83	4.33	0.71	
	5. 子育てで困ったときに、相談する相手がいなくて苦労することがある	1.88	1.11	1.89	0.93	
	6. 自分の子育てのやり方はうまくいっていると思う	2.82	0.88	3.22	0.83	t=-2.29*
	7. 自分の子育てのやり方がうまくいっていないと思う	3.31	0.87	3.22	1.09	
	8. 子育てによって、子どもの個性や性格は決まると思う	4.00	0.71	3.33	0.87	t=2.83*
	9. 自分は叱られて育てられたと思う	3.24	1.09	3.11	1.62	
	10. 自分は誉められて育てられたと思う	3.06	0.75	2.56	0.88	t=2.00†

Table 3 子育て困難群と一般群のペアレントトレーニング実施前の得点比較

注 網掛けは一般グループの方が高いもの。 網掛けかつ斜線はジョイジョイグループの方が高いもの		子育て困難		一般群		事前事後の比較
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
A	1. 私の子どもは、育てやすい子どもだと思う	2.89	1.13	3.41	0.89	1.72 †
	2. 私の子どもは、育てにくい子どもだと思う	3.28	1.18	3.00	1.04	
	3. 私の子どものいいところを具体的に10個程度あげることができる	3.22	1.06	3.96	0.92	2.47 †
	4. 私の子どもががんばっているところ(努力しているところ)が具体的に10個程度あげることができる	2.94	1.00	3.42	1.14	
	5. 私の子どもの苦手なところや気になるところが具体的に10個程度あげられる	3.12	1.22	3.27	1.04	
	6. 私の子どもの困ったところを具体的に10個程度あげられる	3.35	1.17	3.00	1.18	
	7. 私の子どもの性格や個性がよくわかっている	3.94	0.83	3.41	0.80	-2.13 †
	8. 私の子どもの性格や個性がわからないと思う	2.59	0.87	2.67	0.73	
	9. 私の子どもは、とてもかわいい	4.47	0.87	4.77	0.51	
	10. 私の子どもは時々かわいくなる	3.88	0.86	2.66	1.35	-3.64 †††
B	1. 子どもの育児が楽しいと思う	3.71	1.05	4.33	0.73	2.34 †
	2. 子どもの育児がつらいと思う	3.41	1.06	2.78	1.15	-1.83 †
	3. 子どもの育児がうまくいっていると実感する	2.71	1.21	3.19	1.00	
	4. 子どもの育児がうまくいっていないように感じる	3.41	1.06	2.59	0.93	-2.69 †
	5. 私自身のいいところを具体的に10個程度あげることができる	2.47	0.87	3.15	1.13	2.10 †
	6. 私自身のがんばっているところ(努力しているところ)が具体的に10個程度あげることができる	2.82	0.95	3.15	1.10	
	7. 私自身の苦手なところや気になるところが具体的に10個程度あげられる	3.24	1.03	3.19	1.14	
	8. 私自身の困ったところを具体的に10個程度あげられる	3.24	0.90	3.15	1.06	
	9. 子どもを誉めることが多い	3.59	0.94	3.81	0.96	
	10. 子どもを叱ることが多い	3.71	0.99	2.93	1.24	-2.19 †
C	1. 子育てにおいては、悪い行動を叱って正さなければならない	3.88	1.11	3.59	1.05	
	2. 子育てにおいては、よい行動を誉めて教えなければならない	4.71	0.47	4.70	0.54	
	3. 子育てで困ったときは、自分の配偶者や親に相談する	4.41	0.71	4.33	1.07	
	4. 子育てで困ったときは、自分の友人たちに相談する	4.24	0.83	4.11	1.15	
	5. 子育てで困ったときに、相談する相手がなくて苦勞することがある	1.88	1.11	2.22	1.40	
	6. 自分の子育てのやり方はうまくいっていると思う	2.82	0.88	3.15	0.86	
	7. 自分の子育てのやり方がうまくいっていないと思う	3.31	0.87	2.52	0.85	-2.93 †
	8. 子育てによって、子どもの個性や性格は決まると思う	4.00	0.71	4.00	0.78	
	9. 自分は叱られて育てられたと思う	3.24	1.09	2.85	1.26	
	10. 自分は誉められて育てられたと思う	3.06	0.75	3.59	1.12	1.90

Table 4 子育て困難群と一般群のペアレントトレーニング実施後の得点比較

		事後得点				
注 網掛けは一般グループの方が高いもの。 網掛けかつ斜線はジョイジョイグループの方が高いもの		子育て困難群		一般群		事前事後比較
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
A	1. 私の子どもは、育てやすい子どもだと思う	3.22	0.97	4.06	0.57	t=2.73*
	2. 私の子どもは、育てにくい子どもだと思う	3.33	1.00	2.25	1.00	t=-2.60
	3. 私の子どものいいところを具体的に10個程度あげることができる	4.56	1.01	4.81	0.40	
	4. 私の子どもががんばっているところ(努力しているところ)が具体的に10個程度あげることができる	4.44	1.01	4.81	0.40	
	5. 私の子どもの苦手なところや気になるところが具体的に10個程度あげられる	4.00	1.22	4.13	1.09	
	6. 私の子どもの困ったところを具体的に10個程度あげられる	3.89	1.27	3.94	1.29	
	7. 私の子どもの性格や個性がよくわかっている	4.22	0.83	4.13	0.50	
	8. 私の子どもの性格や個性がわからないと思う	2.11	0.78	1.69	0.48	
	9. 私の子どもは、とてもかわいい	4.56	0.73	4.81	0.40	
	10. 私の子どもは時々かわいくなる	3.78	0.83	3.13	1.41	
B	1. 子どもの育児が楽しいと思う	4.22	0.67	4.50	0.63	
	2. 子どもの育児がつらいと思う	3.44	1.01	2.38	1.02	t=-2.10*
	3. 子どもの育児がうまくいっていると実感する	3.33	0.87	3.75	0.68	
	4. 子どもの育児がうまくいっていないように感じる	2.78	0.97	2.13	0.62	t=-2.06†
	5. 私自身のいいところを具体的に10個程度あげることができる	3.89	1.45	4.75	0.77	
	6. 私自身のがんばっているところ(努力しているところ)が具体的に10個程度あげることができる	4.00	1.50	4.75	0.77	
	7. 私自身の苦手なところや気になるところが具体的に10個程度あげられる	3.67	1.32	4.19	1.17	
	8. 私自身の困ったところを具体的に10個程度あげられる	3.89	1.27	4.19	1.17	
	9. 子どもを誉めることが多い	4.11	0.93	4.50	0.52	
	10. 子どもを叱ることが多い	3.56	1.24	3.13	1.15	
C	1. 子育てにおいては、悪い行動を叱って正さなければならない	3.22	1.30	2.81	1.05	
	2. 子育てにおいては、よい行動を誉めて教えなければならない	5.00	0.00	4.63	0.62	t=-2.42*
	3. 子育てで困ったときは、自分の配偶者や親に相談する	4.56	0.73	4.56	0.63	
	4. 子育てで困ったときは、自分の友人たちに相談する	4.33	0.71	4.50	0.63	
	5. 子育てで困ったときに、相談する相手がなくて苦労することがある	1.89	0.93	1.69	1.08	
	6. 自分の子育てのやり方はうまくいっていると思う	3.22	0.83	3.75	0.58	t=1.87†
	7. 自分の子育てのやり方がうまくいっていないと思う	3.22	1.09	1.88	0.72	t=-3.73**
	8. 子育てによって、子どもの個性や性格は決まると思う	3.33	0.87	3.38	1.26	
	9. 自分は叱られて育てられたと思う	3.11	1.62	2.40	1.06	
	10. 自分は誉められて育てられたと思う	2.56	0.88	3.31	1.20	t=1.81†

Table 5 一般群のペアトレ実施前後の抑うつと理想と現実のギャップ得点

	1～3歳, 3～5歳児				事前事後の比較
	ペアトレ前		ペアトレ後		
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
理想と現実のギャップ	9.33	4.10	6.53	2.70	t=4.23**
抑うつ	3.88	3.06	3.00	2.60	変化なし

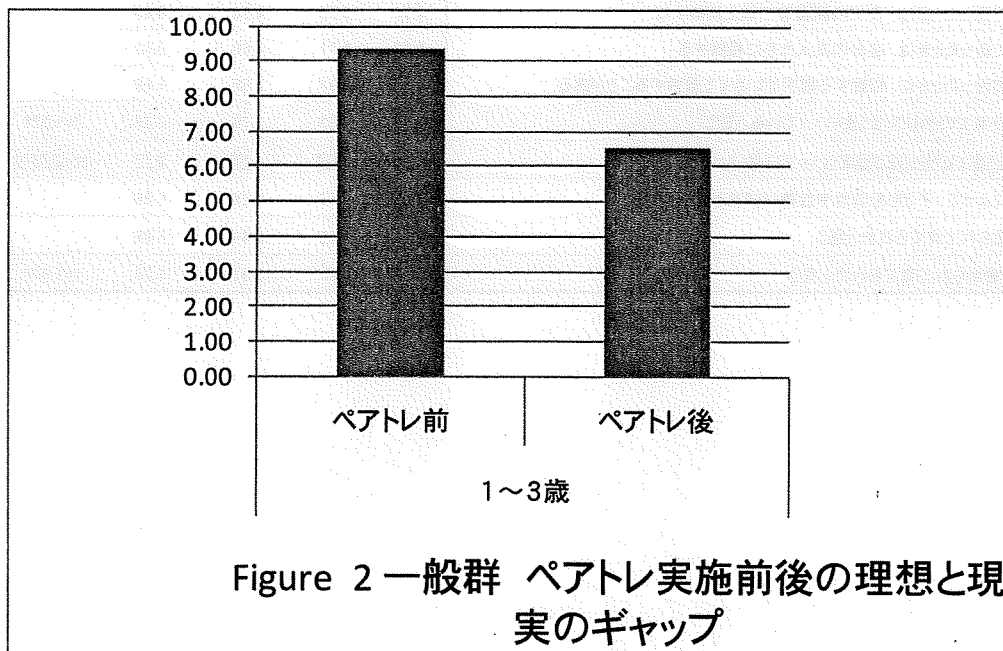
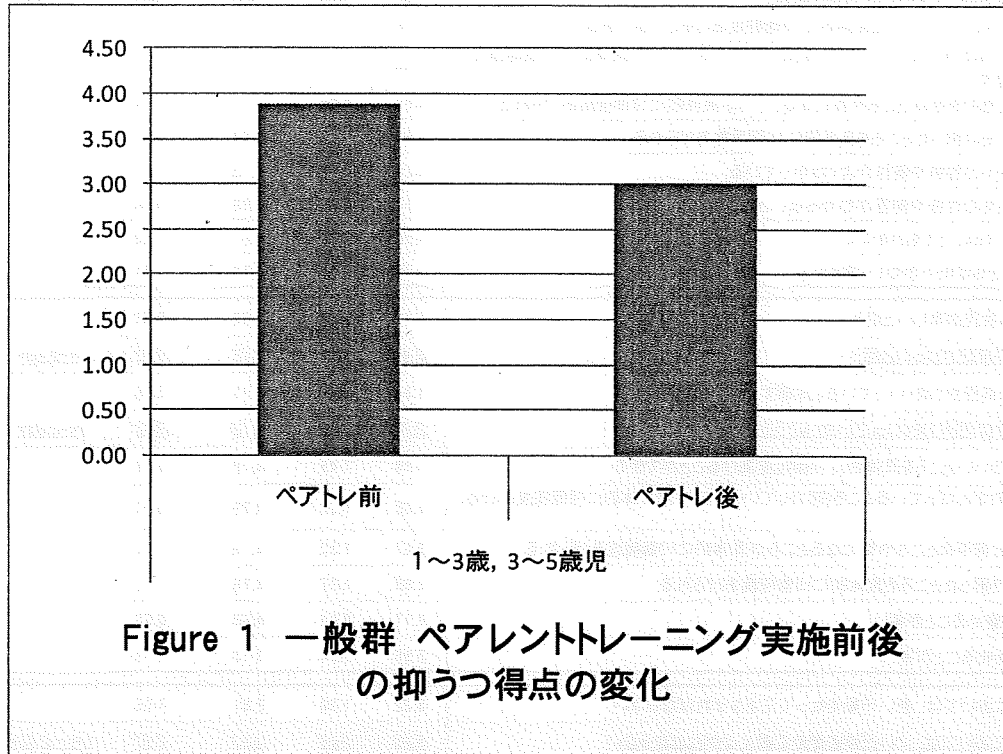
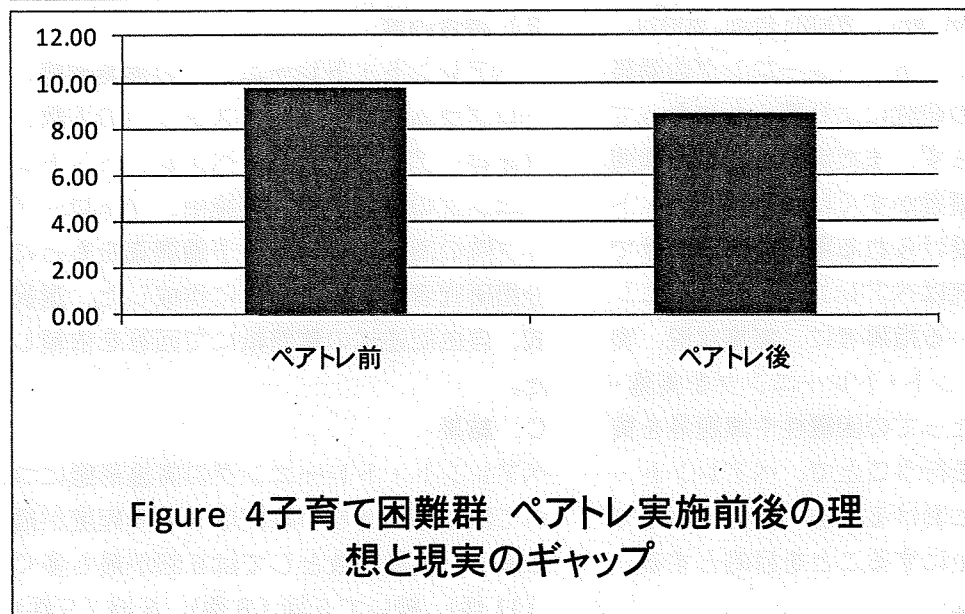
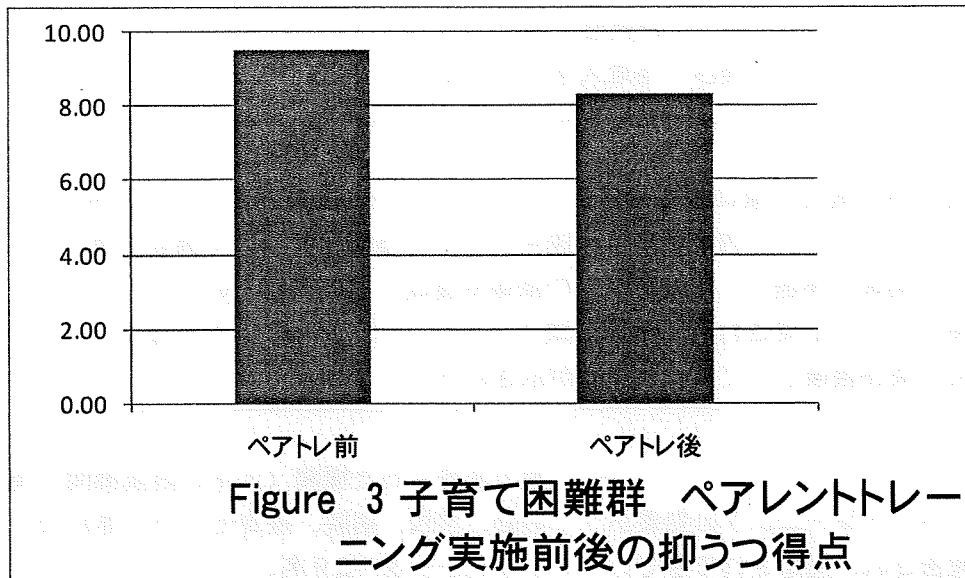


Table 6 子育て困難群のペアレントトレーニング実施前後の抑うつと理想と現実のギャップ得点

	ペアトレ前		ペアトレ後		事前事後の比較
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
理想と現実のギャップ	9.75	3.11	8.63	3.70	t=3.21*
抑うつ	9.55	8.63	8.33	6.44	変化なし



発達障害児の親を対象としたペアレント・トレーニングの実施・運営についての調査

分担研究者

井上雅彦 鳥取大学医学系研究科

研究協力者

松尾理沙 鳥取大学 大学院

研究要旨

発達障害児を持つ親を対象にしたペアレントトレーニングを実施している 29 機関に対してプログラムの内容や実施・運用にかかわる課題について調査を実施した。その結果、課題としてスタッフの確保や養成、他の業務とのバランスに課題を持つことが示唆された。今後地域にペアレントトレーニングが普及していくための条件整備としての検討課題が示された。

A. 目的

近年、ペアレント・トレーニングの効果が日本でも多数報告され、周知されてきている(高階ら, 2008; 野口, 2002; 岩坂, 2007)。しかし、ペアレント・トレーニングの効果が、これまでの研究により明らかになっているにも関わらず、まだ実施している機関が少なく、希望者がすぐにペアレント・トレーニングを受けられる環境であるわけではない。本研究はペアレント・トレーニングを実施している指導者に、実施状況、実施内容、ペアレント・トレーニングを実施・運営するにあたっての困難性や課題等を質問紙にて調査を行うことで、ペアレント・トレーニングにおける実施・運営する上での課題を明らかにすることを目的とする。

B. 対象と方法

1) 対象

ペアレント・トレーニングを実施している指導者を行動分析学会、特殊教育学会、行動療法学会、LD 学会、小児精神学会のペアトレ関連発表・研究発表から抽出し調査

協力を得られた機関(大学の附属機関、親の会、学校、病院、療育センター等)のファシリテーター29名。

2) 調査内容

ペアレント・トレーニングの実施形態、プログラム内容、規模、スタッフの人数、フォローアップの有無、ペアレント・トレーニングの準備段階、実施中、フォローアップ時の困難について、予備調査をもとに分担研究者によって独自に作成した、選択式、自由記述式の質問紙にて回答を依頼した。

C. 結果

ペアレント・トレーニングの実施形態については1回あたりの時間は2時間程度が最も多く、実施回数としては6回が最も多く(11件)、続いて5回(8件)、8回(5件)であった。対象とする子どもの年齢は小学生以下のところが多かった。スタッフは心理士が最も多く18名であり、続いて保健士が12名、大学教員、学生がそれぞれ10名と続いていた。スタッフの中で中心となってプログラムを進めるファシリテーター

は心理士が 19 名と圧倒的で、保健士が 10 名、大学教員 7 名と続いていた。ファシリテーターの経験年数は、大半（12 名）が一年程度であり、経験年数の浅さも伺えた。

内容として多かったのは、ほめ方、しかり方、トークン、環境調整、視覚支援、問題行動への対応であった。参加者のアセスメントとしては多くの機関が子ども（19 名）、親（24 名）とも何らかの尺度を実施し測定していた。尺度の種類としては子どもの場合は S-M、KIDS、CBCL、SDQ、愛着尺度、ソーシャルスキル尺度など、親の場合は、子育ての自信度を測る質問紙、KBPAC、GHQ、STAI、子どもへのかかわり方、FDT、QOL 尺度、PSI、BDI、養育スキル尺度 などであった。

ペアレントトレーニング実施準備中、ペアレントトレーニング実施中の課題について Fig. 1～Fig. 3 に示した。設問は複数の選択肢に対してその中から上位 3 つを番号で解答させるものであり、凡例の数値はその順位を表している。実施の前後で課題として多くあげられたのが他の業務とのバランスであった。またスタッフの確保や移動に対応したスタッフ養成、ミーティング時間の確保などスタッフに関連する項目に課題が多くあげられた。運用に関連しては参加者同士のやりとりの活性化やグループワークの運用についての項目が目立った。

D. 考察

本調査によって、各地域で実施されているペアレントトレーニングの実態が明らかになった。特徴としては、小学生以下の子どもを持つ親を対象とした連続講座形式で応用行動分析や環境調整を主体にした内容であった。運用面ではスタッフに関連する内容やグループワークに関することがあげられ、他の業務とのバランスが課題となっていることが伺えた。

これらの結果を踏まえた上で、地域にこ

れらのペアレントトレーニングが定着していくためのスタッフ養成の在り方や運用の方法についても検討していく必要がある。

E. 結論

本研究では発達障害児を持つ親を対象にしたペアレントトレーニングを実施している 29 機関に対してプログラムの内容や実施・運用にかかわる課題について調査を実施した。その結果、課題としてスタッフの確保や養成、他の業務とのバランスに課題を持つことが示唆された。今後地域にペアレントトレーニングが普及していくための条件整備としての検討課題が示された。

F. 健康危険情報

該当せず

G. 研究発表

梅永雄二・武蔵博文・渡部匡隆・坂井聡・服巻繁・井上雅彦 2009 自閉症の人への様々な支援アプローチ 準備委員会企画シンポジウム 日本特殊教育学会第 47 回大会発表論文集,47

H. 知的財産権の出願・登録状況

該当せず

I 研究協力

松尾理沙 鳥取大学 大学院

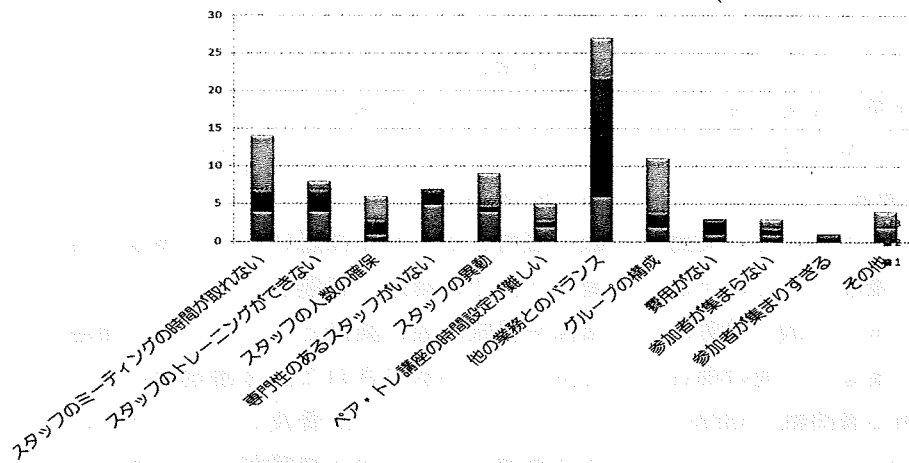


Fig.1 準備段階での課題

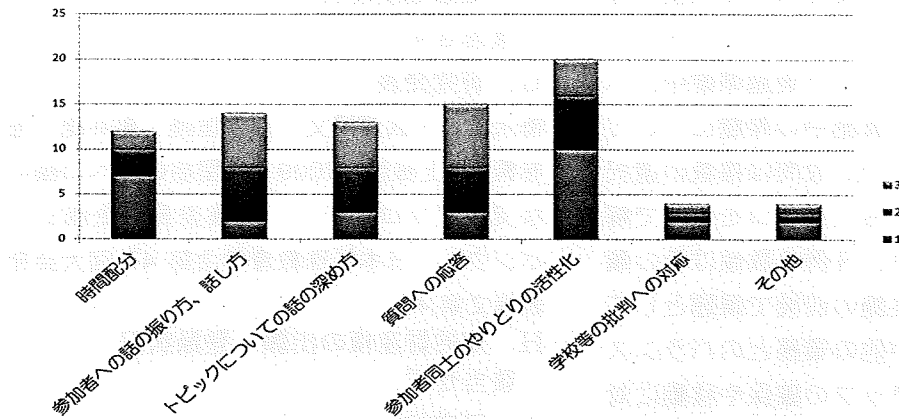


Fig.2 実施に関する課題

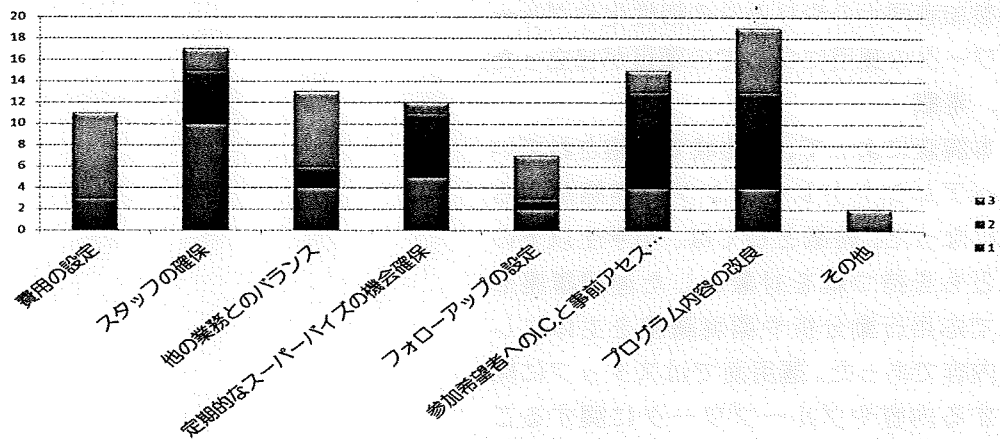


Fig.3 運営に関する課題

自閉症スペクトラムが疑われる親の精神的健康 — 同年代の子どもを持つ親と比較して —

分担研究者

永田 雅子 名古屋大学発達心理精神科学教育研究センター 准教授

研究要旨

発達に明らかな遅れがないものの、多動やコミュニケーションのとりにくさなど自閉症スペクトラムが疑われる就園前の幼児の親の精神的健康度について、抑うつと育児ストレスの側面から検討を行った。同年代の子どもを持つ親と比較検討をおこなったところ、うつ陽性者の割合が高く、育児ストレスが全般的に高値であることが確認された。特に、抑うつの程度の高い人の割合や、親としての有能さのストレスが高く、自閉症スペクトラムが疑われる子どもの親は、通常の子育てに比較して、負荷がかかっていることが確認された。今後、診断前の乳幼児期の親に対して、精神的健康度を改善するような支援の枠組みを検討し、より早期から支援を行っていく必要性が示唆された。

A. 本研究の目的

発達にリスクを持った子どもたちの場合、親は0-2歳代で育てにくさやかかわりにくさなどの不安を抱えていることが多い（柳楽2004）。よりよい親子関係を構築し、子どもにあった支援を取り組んでいくためには、乳幼児期早期の段階での家族支援は欠かせない（Rogers1996）ものの、現在は「様子をみましょう」という経過フォローにとどまり、有効な支援を受けられていないのが現状である。家族支援の必要性について検討するため、多動やコミュニケーションの取りにくさなど自閉症スペクトラムを疑われる子どもの親と、同じ育児環境とサポート源を有する同地域において、同じ年齢の子どもをもつ親の精神的健康を比較検討することで、発達障害とくに自閉症スペクトラムが疑われる子どもの親の精神的特徴を明らかにすることを目的とする。

B. 方法

1. 調査時期および調査参加者

名古屋市近郊の人口約8万の中規模都市において開催されている自閉症スペクトラムを疑われる子どもたちとその親を対象にした育

児支援教室に参加している子どもの親を対象にした。この教室には1歳半児健診や3歳児健診で知的に遅れはないものの、多動やコミュニケーションのとりづらさを持っているとして経過フォローをされてきた子どもや、市内で開催される親子広場などで子どもとの関わりづらさが認められ、親から訴えのあった親子が参加してくる。教室参加前のオリエンテーション時に、調査についての同意をとり、初回参加時に回収をおこなった。

また統制群として、同じ地域で実施されている1歳半児健診および3歳児健診を平成21年6月から7月に受診した児の母親および、同地域で開催されている2歳児対象の親子教室に参加している190名を対象とした。担当保健師および保育士より調査の依頼をおこない、郵送法により回収をおこなった。

2. 調査内容

調査内容は、親の抑うつをはかる尺度として、21項目からなるベック自己評価式抑うつ尺度を使用した。海外においても広く一般的に使われている抑うつのスクリーニング尺度であり、1項目につき0~3点で採点される。

合計得点が14点以上を軽症うつ、20点以上を中等症以上のうつと判断される。

また親の育児ストレスを図る尺度として、78項目からなるPSI育児ストレス尺度日本版を使用した。日本においても保健分野でひろく実施されている質問紙であり、親の側面の育児ストレス、子どもの側面の育児ストレスの二つの下位尺度からなりたっている。親の側面および子どもの側面の育児ストレス尺度は、それぞれ7および8つの下位尺度からなっており、パーセントイル順位をプロットすることで、育児ストレスの度合いをプロフィールで得ることができる。

C. 結果

1. 対象者の属性

育児支援教室に参加した母親31名のうち、回答に不同意であったのは2名であり、回収率は93.5%であった。回答のあった29名を教室参加群とする。

統制群で、回答があったのは51名であり、全対象者の26.0%であった。

教室参加群の子どもの平均年齢2歳5ヶ月±5.1ヶ月(1歳11ヶ月~3歳6ヶ月)統制群の子どもの平均年齢は、2歳2ヶ月±8.1ヶ月(1歳5ヶ月~3歳6ヶ月)であり有意差は認められなかった。母親の年齢も、33.14±4.77歳および33.04±4.45歳でありほぼ同値であった。

2. 親の抑うつについて

教室参加者のBDI平均10.82±8.6(11~26点)、統制群のBDI平均9.23±7.66(0~39点)であり、t検定の結果、有意差は認められなかった(表1)。分布図を図1に示す。軽症うつと考えられる14点以上の得点の母親は教室参加群43%、統制群22.4%、と教室参加群のほうが高率に認められた。特に中等症以上とされる20点以上の割合は、教室参加群18%、統制群4.1%と差が大きく認められた。

3. 育児ストレスについて

次に育児ストレス尺度の検討を行った。すべての下位尺度得点で、教室参加者の育児ストレスが高かった(表1)。子どもの側面、親の側面それぞれの下位尺度をt検定で比較したところ、C1“親を喜ばせる反応が少ない”(p<.05, t値2.67) C2“子どもの機嫌の悪さ”(p<.001, t値5.12)、C3“子どもが期待通りにいかない”(p<.01, t値3.01)、C4“子どもの気が散りやすい/多動”(p<.05, t値2.41)、C6“子どもに問題を感じる”(p<.001, t値6.33) C7“刺激に敏感/ものになれにくい”(p<.05, t値2.35)、P4“親としての有能さ”(p<.001, t値3.28)、P5“抑うつ・罪悪感”(p<.05, t値2.29)、P8“親の健康状態”(p<.01, t値3.07)と多くの下位尺度で教室参加群のほうが有意に育児ストレスが高かった。また総得点でも、“子どもの側面”(p<.001, t値5.43)、“親の側面”(p<.05, t値2.35)ともに教室参加群のほうが有意にストレスが高かった。PSI総点においてもt値3.43(p<.001)であり教室参加群の母親のほうが高かった。

D. 考察

子どもが多動やコミュニケーションのとりづらさなど自閉症スペクトラムが疑われ育児支援の教室に参加した親は、抑うつ傾向が高く、育児ストレスも全般的に高いという結果がえられた。統制群の回収率が低いため、回答をすることができた母親という母集団の偏りは考慮する必要があるものの、同じ地域で、同年代の子どもの育てている母親に比べて、母親の抑うつや育児ストレスが有意に高かった。母親の抑うつが高いことは、子どもへの応答性の低さに関連しているということがこれまでの研究でも明らかにされている。また育児ストレスが高く、とくに母親としての有能感をもてていないということは、母親の抑うつをより強めることにつながっていると考えられる。今後、家族の精神的健康の増進と、

親子の関係を支援していくために、より早期から母親への育児支援を積極的に行っていく必要性が明らかになった。

E. 結論

自閉症スペクトラムが疑われる子どもを育てている親は、同年代の子どもを持つ親と比較して、うつ陽性者の割合が高く、育児ストレスが全般的に高値であることが確認された。特に、抑うつの高人の割合や、親としての有能さのストレスが高く、自閉症スペクトラムが疑われる子どもの親は、通常の子育てに比較して、負荷がかかっていることが確認された。

F. 健康危険情報

なし。

G. 研究発表

1. 学会発表

永田雅子・細溝さやか 2009 かかわりにくい・育てにくい子を育てる親への育児支援教室の効果（1）～親の育児ストレスの検討～

第101回 日本小児精神神経学会 名古屋

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし。

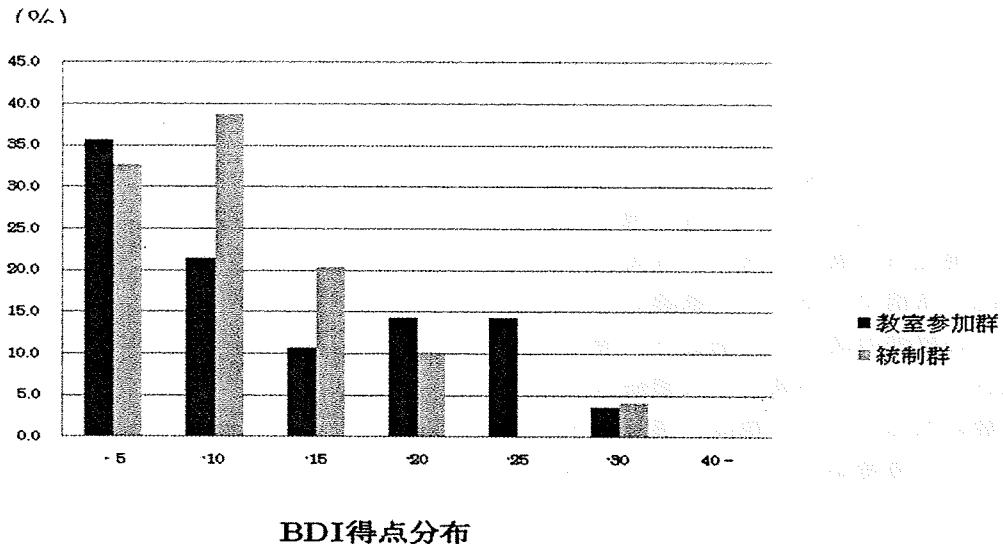


図1 BDI 得点分布

表1 教室参加群と統制群のT検定結果

	教室参加群	統制群	有意差
BDI 得点	10.82	9.27	
C1“親を喜ばせる反応が少ない”	13.18	11.10	*
C2“子どもの機嫌の悪さ”	21.54	16.33	***
C3“子どもが期待通りにいかない”	12.07	9.79	**
C4“子どもの気が散りやすい/多動”	17.11	14.73	*
C5 “親に付きまとう/人になれにくい”	13.11	11.69	
C6“子どもに問題を感じる”	11.21	7.79	***
C7“刺激に敏感/ものになれにくい”	9.82	8.31	*
子どもの側面総点	97.57	79.21	***
P1“親役割によって生じる規制”	22.46	21.02	
P2 “社会的孤立”	16.79	15.40	
P3 “夫との関係”	11.93	11.60	
P4“親としての有能さ”	23.82	20.33	***
P5“抑うつ・罪悪感”	11.79	10.10	*
P6 “退院後の気持ち”	9.61	9.04	
P7 “子どもに愛着を感じにくい”	7.25	6.60	
P8“親の健康状態”	7.93	6.17	*
親の側面総点	111.57	100.38	*
PSI 総点	209.14	179.48	***

*** $p < 0.001$ ** $p < 0.01$ * $p < 0.05$

地域に根差した子育て支援における支援者育成プログラムの効果について

主任研究者 辻井正次 中京大学現代社会学部

協力研究者 松岡弥玲 中京大学現代社会学部

日本障害者リハビリテーション協会 リサーチレジデント

研究要旨

本研究では、ペアレントトレーニングの研修において育児中の母親を対象に指導を経験した保育士（園長補佐）を対象にアンケートを実施し、研修の効果や課題について検討した。アンケートでは研修を経験した上での全体の感想、工夫した点、難しかった点、良かった点をたずねた。多くの保育士で共通に挙げられていた内容として①時間配分やグループ構成など「進行に関すること」の不安や難しさと自分なりの工夫②参加者の不安を解消したり、自分自身で解決を見つけることを促すための「参加者への言葉かけ」の難しさや効果、③「参加者の変化（参加者の交流）」を実感することでの喜び④「現状把握表の書き方」の説明の必要性や難しさが挙げられていた。ペアレントトレーニング研修（全5回）の各回における感想では、初回に戸惑いや不安を示していた保育士が最終回には参加者の前向きな変化を見て、達成感を感じている様子が語られていた。

A.研究目的

本研究の目的は、発達障害児の支援につながる家族支援を担う人材養成と普及の方法を検討していくことである。より地域に根差した子育て支援者を育成するために、保育士（園長補佐）を対象として、ペアレントトレーニングの研修を行った。研修は、主任研修者が実施したペアレントトレーニングに補助として1クール（全5回分）参加する形式のものと、実際に保育士がペアレントトレーニングの指導を行うものの2段階を実施した。

本研究では、2段階の研修を全て参加し、育児中の母親を対象としたペアレントトレーニングの指導を経験した保育士（園長補佐）を対象にアンケートを実施し、支援者

育成のための研修の効果について探索的に把握することを目的とする。

B.研究方法

1. 参加協力者 愛知県大府市の保育士（園長補佐）12名。

2. 研修内容 (1) 主任研修者が実施したペアレントトレーニング（1クール5回 一回2時間）に1クール以上参加し、プログラム構成を学んでもらった方を対象とした。

(2) 保育士6名が1グループとなり、1～3歳もしくは3～5歳の子どもを持つ母親を対象としたペアレントトレーニングにおいて指導を担当した。6名のうち、2名もしくは3名が司会を担当し、残りの3～4名がペ

アレントトレーニングに参加した母親たちのグループに入り、グループ運営を行った。司会係とグループ運営係は毎回交代した。

3. アンケート内容

(1) ペアレントトレーニングの指導を経験した感想

ペアレントトレーニングの指導を経験した全体的な感想について尋ねた。司会係の場合と、グループ運営係の場合の2パターンについて尋ね、自由記述で回答を求めた。以下の(2)、(3)、(4)の質問に関してもこの2パターンについて尋ねている。

(2) 指導する上での工夫、気づきについて
ペアレントトレーニングの指導をする上で自分なりに工夫した点、気づいた点について、自由記述で回答を求めた。

(3) 指導する上でうまくいった点について
ペアレントトレーニングの指導を経験して、自分なりにうまくいったと思う点について自由記述で回答を求めた。

(4) 指導する上で難しかった点
ペアレントトレーニングの指導を経験して難しかったと思う点について尋ねた。

(5) 各回での感想
ペアレントトレーニングは5回で1クールであり、それぞれの回ごとに指導する内容が異なる。そのため、各回で特に感じたことについて回答を求めた。

第1回目の課題 導入・現状把握表の書き方の説明(現状把握表とは、母親が自分自身と子どもの行動をできるだけ具体的に「良いところ」、「努力しているところ」、「困ったところ」、「苦手なところ」の4種類へと整理していく表である。母親自身が現状を客観的に把握して、子どもとのやりとり

を円滑に進める力を養うことを目的としている。詳細は、川上ちひろ、辻井正次、(2008). 高機能広汎性発達障害を持つ子どもの保護者へのペアレント・トレーニング—日本文化のなかで子育てを楽しくしていく視点から。精神科治療学 23(10), 1181-1186 を参照のこと。

第2回目の課題 現状把握表の書き方をマスターさせる

第3回目 現状把握表で挙げられた内容をカテゴリーごとに分ける

第4回目 現状把握表の内容から親子の具体的なやりとり(うまくいったやりとり・うまくいかなかったやりとり)へと発展させる

第5回目 まとめ 現状把握表の完成
(6) ペアレントトレーニングの指導上のポイントに関する自己評価

ペアレントトレーニングの指導をする上で必要なポイントについて、どの程度意識できていたかについて尋ねた。ポイントは以下の3点である。

①ペアレントトレーニングの目的について(3項目)

「子どもはみな違う個性を持っていることを理解させること」、「ペアレントトレーニングの目的は、母親が自分自身の頭で考えながら子育てをする力をつけることであることを理解させること」、「日本的な子育て(あまりほめない)ではなく、『できていることをほめる』子育てを目指すこと」といった、ペアレントトレーニングを行う上での目的について意識しているかについて尋ねた。

②現状把握表の書き方について(10項目)

現状把握表の書き方について『性格（形容詞）』でなく、『行動（動詞）』で書くことを指導すること、「具体的な内容で書けるように指導すること」、「『良いところ』を『すぐれたところ』ではなく、『適応的である（なんとかうまくいっている）ところ』として理解させること」、「『良いところ』と『努力しているところ』は『～しない』という表現で書かないことを理解させること」などの10項目である。

③参加者同士の話し合いについて（3項目）

「参加者同士のコミュニケーションを大切にし、必要以上に指導者が方向性を示さないこと」、「深刻度の高い参加者（例えば、参加者自身が精神的に不安定である、子どもの問題が深刻である）がいた場合、対応に配慮すること」などの3項目である。以上の①～③について「あてはまる」～「全くあてはまらない」までの5件法で回答を求めた。

4. 調査手続き 研修が終わった後、アンケートと返信用封筒を配布し、自宅で記入後に郵送してもらった。

（倫理面への配慮）

研究参加者への研究目的や得られた資料の管理や使用について説明し、理解が得られた場合のみ研究に協力していただくよう、最大限参加協力者への人権に配慮した実施を行った。

C. 研究結果

調査協力者12名のうち、10名からアンケートの返答があり、この10名を分析対象

とした。具体的な内容はTable 1担当。

全体の感想、指導上での工夫、うまくいった点、難しかった点をたずねたが、全体を通して挙げられている内容には、いくつかのまとまりがみられた。

主にあげられていたのは以下の内容である。①時間配分や、話題の方向性の修正、グループの構成の仕方など「進行」に関すること、②参加者にどのような言葉かけをしたらよいかという難しさや、笑顔や共感を示すことが参加者の話し合いをスムーズにさせるといった「参加者への言葉かけ」に関すること、③参加者が徐々に前向きになる変化や、参加者同士の交流が深まっていく様子に気がつく「参加者の変化（参加者の交流）」に関すること、④参加者に行動を具体的に挙げてもらうことが難しかった、カテゴリーに分けることの指導など「現状把握表の書き方」に関することである。

（1）ペアレントトレーニングの指導を経験した感想

全体の指揮を担当した場合は、進行をすることに対する不安を挙げる保育士が多かった。研修では司会係のスタッフが複数いたため、スタッフ同士で打ち合わせをして協力し合うことで不安を解消していることが書かれていた。

グループ運営を担当した場合は、参加者への言葉かけの難しさ、参加者をグループに分ける際の工夫の必要性、ペアレントトレーニングを経験して変化していく参加者に対する気づきなどが挙げられていた。

（2）指導する上での工夫、気づきについて
全体の指揮を担当した場合は、グループ運営を担当した場合の双方ともに、「参加者へ